

ニューギニアのフェンス
—文化技術論の変化する視点—¹

ピエール・ルモニエ
(後藤 明 監訳)

1. はじめに

技術的行為のもっとも物理的な次元に注意を払うことが、文化とその社会的構成あるいは思考のシステムに関するもっとも基本的な情報を明らかにするひとつの方法であり、また他の人類学的アプローチでは提供されない方法であることが過去10年にやっと明らかにされてきた。なぜそんなに最近になってから分かったのだろうか。これこそ私が論じようとすることである。

とくに技術の人類学の他の発見すべて、そしてとくに消費に関する「物質文化研究」による発見に加え、モノに対する新しい役割が開拓されてきた。それは共有された世界観と行為の形成へモノが巻き込まれているということである。一連の民族学者はモノを研究してきたが、モノに関して思考の混合や収束が起こり、それが特定の社会システム、あるいは文化に通底する鍵となる価値観、矛盾、あるいは緊張と関係する非宣言的なメッセージの出現につながるのである。

私はフランスの研究者が「文化的技術論」の表題のもとにモース的な民族誌と物質的行為の人類学を開始し発展しようとしてきたことをたまたま目の当たりにしてきた。われわれが見ていくように、過去45年の間に革新的な視点の変化があった。

1. 文化的技術論：領域

定義上、人類学者の第一の仕事は、彼らがそこそこで観察する一時的に安定した社会組織、文化、思考システムを記述し、理解しようとするものであることはいままでもない。そして社会システムの諸側面とそれらの関係が時間を超えていかにそしてなぜ変化するかを理解することである。人類学者は社会生活と人間行動の特定の領域が互いに関連していることを描くことによってそれをなしとげる。伝統的には人類学者は人々が結婚し子供に対する権利と義務をいかに得るか（これがいわゆる親族組織）、人々が見えざる世界と交流するやり方（宗教、儀礼、呪術）、人々が権力を構成するやり方（政治）、人々が過去を

¹ 本稿は、2015年1月31日にピエール・ルモニエ教授を招いて開催された人類学研究所主催の公開研究会“Reflections on a New Guinea fence: Changing points of view in *Technologie Culturelle* (1970-2015)”の発表原稿を、後日加筆修正したものの翻訳である。翻訳は監訳者・後藤明のほか、南山大学大学院生の加藤英明、坂下凌哉が行なった。なお、以下の脚注は、すべて訳注である。

操作し、ジェンダー関係を構成し、われわれが「環境」とよぶ資源へアクセスする方法をみようとしてきた。

周知のように M.モースは社会生活のこれらの領域について、われわれがモノに対して遂行するもっとも自然な行為（たとえば歩行、座る、泳ぐ、あるいは出産）はいつもどこでも文化的生産物だと示すことで技術と定義した(Mauss 1934)。現代的な言葉でいうと、A.ウェルナーが *Man* 誌の論文(Weiner 1983)の中で、モースがいったことは「人々は、あえていうなら「単に」人工物の使用を通して社会関係を造りあるいは強化することを含めて、モノを使って何をしているか?」、であるとしばしばいいなおされてきたと指摘している。どのような意味でモノは人々に互いに行為しあうように導くのか。「アフォーダンス」「エージェント」「思考の束」「マテリアリティ」「マテリアル」などの名称のもとで、これらの問題がしだいに理論的な関心を引きつけてきた。しかし様々な理由で「物質文化研究」を発展させる人類学者の中でさえも、実際のモノの物質性と行為を考慮する者は極めて少ない。

文化的技術は単にモノや技術に関する多くの視点のひとつである。それは物質的世界に対する行為の手段として理解される技術へ関心を払う社会科学のひとつである。それは単にモノが政治的、宗教的、経済的、芸術的あるいは他の実践や表象のセットかどうかを問うだけではなく、どのようにその概念、物質的生産、物理的特徴、そしてそれが物理的にいかに使われるかが、それらを作り使う人間集団の特徴であるかを問うことである。Technologie culturelle は chaîne opératoire (操作連鎖)、その要素、そして時空間的な変異を記録し分析することでこれをなしとげようとする。人類学のこの分野はモースやルロワ＝グーランに直接影響を受けたバルフェ (Balfet) やクレスウエル (Cresswell) によって発展させられた。数え切れないほどのこのアプローチの事例、すなわち Technologie culturelle あるいは文化的技術論と呼ばれる名称は諸技術 les techniques に関する知識を意味するが、*Technique & Culture* 誌で論文を見いだすことができる。

Technologie culturelle は 1970 年代パリという独特の知的環境の中で生まれた。それは人類学者や歴史家がともに仕事をしていた時代であった。それに加えて経済人類学者やマルクス主義者が M.サーリンズ (Sahlins)、M.ゴドリエ (Godelier)、あるいは M.ブロック (Bloch) などの人々とともに大きな勢力になっていた。さらに構造主義が絶頂期であった。多くの社会学者がマルクス主義者であり、生態学(環境)を扱う人々の間ではとくにシステムという概念がもてはやされていたことを加えるならば、technologie culturelle が統合しようするものの中にはすべての要素が含まれていた。

研究者たちは技術システム研究においてモースに関するルロワ＝グーランの視点、マルクス主義、構造主義を接合しようと望みのない試みを模索した。本稿の序論でもわかるようにそれは出口のないことを証明したが、それは私が語ろうとする話の一部である。われわれがあらたに technologie culturelle を発展させる前に、これらの失望に繋がった研究を概観しておこう。

2. マルクス、ルロワ＝グーラン、レヴィ＝ストロースは技術論者か?

1970年代に話をもどすと、モースやルロワ＝グーランに影響をうけ、あるいはバルフェやクレスウェルと一緒に仕事をしてきた研究者たちは *technologie culturelle* そのものの名の下に操作連鎖や技術システムを記述する方法論を延々と議論してきた。(私は同時代に M シフアー (Schiffer) が技術的行為の記述に関して同様の考えに従事していたことを最近知った)。

正確な理論的枠組みがなかったので、ここで私が意味しているのはもっと正確には「われわれは技術と文化の関係を研究したいと望んでいた」ということであるが、みな「技術的事実」の集積を記録することが第一義であると同意していた。鍵になる概念——ところですべては理論的概念ではないが——は *chaîne opératoire* であるが、それはたくさんの関係、エージェント、さらに技術的行為に含まれる要素を同定し位置づけることを促し、記憶を補完するのだが、それらの多くは後にアクターネットワーク理論として提唱されたモノが含まれていた。それらを観察し記述することがそれゆえ隠された社会技術的な論理（なんと呼ばれようが！）を判読するために絶対的な前提条件であり、われわれはそれを実践的に語るができる操作連鎖を要約した青写真として考えた（ここで私は 1976 年に操作連鎖を記述した、フランス語の自らの論文を引用しなくてはならない）。

その頃 *techniques* はマテリアリティを意味し、マテリアリティはマテリアリズムを意味していた。1970年代の初期、*technologie culturelle* とマルクス主義者はそれゆえ希望に満ちていた。簡潔にいうと人々が生産し物質的な対象を使うやり方は社会や歴史を変える鍵となる要因と考えられた。最近、石器利用をやめた社会は劇的な「生産力」の変化とされる生活様式および社会の変化の一種の比較のための実験室であった。われわれは「生産様式」を特徴づけ、記述するべきであったし、生産力（物質的および精神的の両方）をみることはプログラムの一環であった。少なくとも理論的には、という矛盾しているように聞こえるが、(実は) 生産力はマルクス主義的経済人類学では研究されてこなかったからだ。

実際、マルクス人類学における物質文化研究は生産力、すなわち対象、技術そしてノウハウに注意を払わなかったという、まさにその理由で出口のないものであった。実践の中で、調査は生産力（土地、道具、労働、知識、種子など）と関係する社会関係の構成に焦点が当てられた。われわれが追い求めていたのは生産様式や社会経済的形成体の本質的特徴と考えられたものを要約する公式であった。まずそれは「原始的」人々の協業の型式を特徴づけ要約することであった。生産力の分析は労働の生産性や道具の効率性のみを取り扱った。

信じられないがほとんど定義通り、モノそのもの、生産過程の物理的な側面は人類学の領域の外にあった。通俗的（誤った）マルクス主義あるいは還元的唯物論に耽溺する恐れから、技術の物理的な次元を社会関係や思想のシステムと何らかの関係あるものとみるために精査することは問題外であった。それはあまり良いスタートではなかった。通俗的唯物論とは何か？ それは（誤った）マルクス主義の一種で経済を技術やとりまく自然と人間との間の生物学的そしてエネルギー的交換に還元してしまうものである。

バルヤに関するゴドリエの論文はその時代のすぐれた有名な研究事例である。それは私自身の同じ人々の現在の事例研究だというばかりではなく、彼はバルヤの、生産力の研究において、とくに塩貨幣生産の事例研究および石と鉄の道具の比較において、おそらくも

っとも問題を深化させた経済人類学者であったからだ。彼は純粹には技術論研究者ではなかったが、理論的に参照された研究者であった。両方の研究において彼の分析は労働時間の比較に基礎をおいていた。それは最初の事例では樹皮マントと塩棒との交換を評価するために、そして二番目の事例では生産性の利益を正しく評価するために、である。

私がすでに述べたように、構造主義もまた技術に関するプログラムの一部であり、もっとも楽観的な（自分がその筆頭だが）研究者は *chaîne opératoire* のパターンと他の構造との間に対応を探してきた。つまるところ親族構造、神話の構造、言語の構造はあるが、技術の「構造」はあるのであろうか。われわれの夢は、そして何年ものあとそれはなんたるかに気づいた夢だったが、その夢は（1）何らかの経済的諸構造と社会生活の他の側面との間のある種の対応の輪郭をとらえて把握すること、（2）操作連鎖の規則性、特徴、さらによければ「諸構造」（再び！）を明らかにすることである。しかしこのような考え方はどこへも導かなかった。

なぜならば何年かには前には分類の人類学が流行していたために、いくつかの集団に共有され、まだ規定されていない論理構造の一部分である共有された構成原理に通ずるような、いろいろな技術に関する類似した観点が存在すると思ってしまった。これは間違いであった。そして *chaîne opératoire* の形態的諸側面と社会構成の規則性との間の「構造的相同」の追究とまったく同じように、構造主義の物質文化研究への適用は夢であった。しかし人工物が純粹に物質的対象としたコミュニケーションに参加するという考えは正しかった。

ルロワ＝グーランの方法、マルクス主義の方法、そして構造主義の方法とともに、技術がひとつのシステムであるということ、そのことで技術は広い社会関係、思考、そして行為の一部であるという考え方は流行していた（1983年に出された私自身の論文「技術的システムの研究：緊急事態」そして次にすぐ来る ANT 理論でも）。技術あるいは対象が造られあるいは使われるやり方は単なる物質的な効果を超えて実践や思考システムと結びついているという考え方にはみな賛同した。

思い返すと、「適合性（compatibility）」の概念はシステムの次元（側面）が研究されるやり方をおそらく一番よく要約している。その時代「構造的な因果関係」という語彙で表現された。たとえばゴドリエによると（再びあげるが）ムブディピグミーの網の狩猟のケースでは、生産プロセスの物質的な側面に由来する相互的な制約の効果である。しかしながら不幸にもいわゆる「構造的因果関係」といわれる分析は、生産過程の再構成を扱った。それは技術的過程の物理的な特徴についてはたいしたことはいっておらず、それはせいぜい制約と見られたのであった。いうまでもないが、適合性の概念（技術的な側面の他の社会関係や文化的生産との適合性）は接合（articulation）あるいは対応（correspondence）に関する特定の緊張関係のみを意味するものであった。その「接合」という概念は生産力と社会的生産関係の間のマルクス主義的關係を明らかにするであろうと思われた。「対応」が位置づけから理解されることに関しては、経済的な構造と社会生活の他の側面との間にあるものであった。しかし多くの他の言葉——エージェンシー、アフォーダンス、思考の束など——のように対応という言葉は現実の民族誌の中で起こっていることを描き理解しなければ意味はない。

かつては私も間違っていた。それは二つのアンガ集団を対比させる、いくつかのなんら

機能的な関係はない異なった技術要素の分布と相関関係を解釈し説明しようとしたときである。1986年の「今日の物質文化の研究」(Lemmonier 1986, 1992)の中で、(そのような相関関係は)私はひとつか複数の意識されない在地の分類システム、あるいは物質的モノを扱う異なった方法を構成するなんらか不思議な「構造」の適応の反映であると提唱した。そのようなものの存在を示すことに行き詰まり、困難を感じた私は10年以上物質文化研究をやめていた。

この古い論文はしばしば引用されたのでいうが、今はそれに同意していないことを私は説明しなくてはならない。

3. スタイル、地図、「構造」：物質文化研究における行き止まりの事例

この1986年の論文は二つのアンガ集団を対比させる技術的特徴の分布図の解釈であった。それはいくつかの異質な、機能的な関連はいっさいない技術的な要素の共変異を示すのではあるが、いかなる環境的な側面あるいは食料供給の必要性とは関連づけられないものであった。「北の集団」は機械的な論理を呼び起こして説明するのは難しい技術的特徴を共有していた：弓の同じ断面、ベルトを作る材料、家の型式、草のスカートの形態、罨、炉および弓矢。「南の集団」はこれらと別のやり方を共有していた。さらにそれらはいくつかの独立した技術と関係していた²。

観察されマッピングされたいくつかの変異(たとえばスカートの繊維や形態、あるいは矢の装飾とか)はルロワ＝グーランがいていた事実の最終レベルに相当するスタイル的な詳細に関わる³。それは、部族間の交換の維持のような他の論理が適用不可能だとしても、

² これらの要素間には、共存するための機能的な連関は見いだせない。すなわちこれらの諸要素の選択は機能的あるいは生態学的(必要性に由来する)のではなく、社会的あるいは文化的としかいいようがないとルモニエは主張したのであった。

³ ここで問題となっているのは傾向(tendance)および事実(fait)という概念である。これはルロワ＝グーランが『進化と技法 Evolution et Technique』[1943, 1945]で提唱し、FTATの牙城たる雑誌 Techniques et Cultureの21号特集号(1993年)などで展開されている概念である。傾向とはある道具などがもっている基本的な機能から来る必然的な特性のことである。たとえば弓であれば、繊維状の物質で力学的エネルギーを貯め、対象に突き刺さる尖った先端をもった細い矢を飛ばすという原理である。これに対応して弓弦や弓に何を使うか、弓の形状はどうであるのか、また弓矢を弓弦にあてがって引くときは指をどのように使うか、あるいはヤジリの形態などに地域差が生まれる。それを傾向に対して事実(fait)と呼んだ。

事実にもその必然性の度合いから一次的(primary)、二次的(secondary)……と序列が見いだせるとルロワ＝グーランは論じた。本文の「事実の最終レベル」とは機能的必然性がほとんどないレベルの変異という意味である。このようなレベルの変異は集団のアイデンティティとか個人の好みなどを反映する度合いが強いといえる。なおこの「傾向」と「事実」という概念には哲学者も注目している。たとえばドゥルーズとガタリは「ルロワ＝グーランは、技術の進化を生物進化の一般の上に構想する技術の生命論を最も遠くまで進めた人である——彼によれば、あらゆる特異性と表現特徴になった普遍的傾向が技術的内部的諸環境を貫いており、こういった環境は、それぞれが取り出し、選択し、統一し、収束させた特異性と表現特徴にしたがって、その普遍的傾向を屈折ないし分化させるのである」(ドゥルーズ・ガタリ 2010: 121)。そしてこの傾向の概念

アイデンティティの指標と解釈しうるものである。部族交換の論理とは、もしあなたが他人に何かを売ろうと欲するならば、あるいはすでにそれを持っている場合でも彼らから何かを買う理由を探そうとするときの論理である。他の一連の変異は特殊な技術的な側面に関わる、あるいは明確に証明できる機能をもっている完璧な技術の存否にすら関わる。たとえばある集団が罾の技術を無視する、あるいは隣接する集団が使うカスワリ、驚あるいは猪の狩猟技術を無視するであろう。あるいはいくつかの集団はいかにそれが致命的な効果があってもカエン付きの矢を使わないであろう⁴。

これらの異なった分布の環境決定論的説明を放棄し、異なったスタイルをあるアイデンティティの要求に対応すると考えることは、説明されるべきことに名前をつけていることにすぎないが、ここで私は「歴史」の役割を呼び覚ますこともしたくなかった。

私の考えでは私の作り上げた分布図に見られるような相同性、それは通常「スタイル」(形態的で可視的な、認知できる装飾)を伴う技術的要素を超えて、技術の使用における技術的な一種の「恣意性」を含む変異がある。結果として一つないし複数の物質的な実践が徐々に発達した結果、それが慣用的になる状況で人々は「これは彼らが習ったやり方だ」からそれらを備えるような状況になる。あたかもその社会の選択で「すべてのことが起こりうる」かのように、である。

私はこれらの選択を説明することができなかったことを認める。しかし私は構造主義的方法にしたがって仮説を立てた。用語の間の関係あるいは関係の間の関係でさえも技術的選択の中でそれ自身が現れると仮定した。私はそのようにいくつかの解決において同時に起こった選択が物質を扱う上での異なったやり方(それはまた異なる選択もありえたやり方)を構成する神秘的な「構造」の反映であると考えた。

私は意味をもつシステムとしてアンガの物質文化の機能様態を理解することは後回しにした。しかしある技術的な特徴が恣意的で慣習的であるという考え方は当時拒否された。私を的確に批判した同僚たちは私の構造主義の仮説は実証性がないと強調した。しかしながら彼らは私が示した技術的事実の分布はある環境的な決定論 (Schiffer 1994 : 203)、いろいろなアイデンティティの戦略 (David and Kraemer 2001 : 194-195)、あるいは歴史を反映しているだとした。構造主義では無視されてきた「歴史」、そして構造主義と歴史のいわゆる相反する性格に関するステレオタイプはレヴィ＝ストロース自身 (Levi-Strauss 1998) によって嘲笑されたし、それに戻る必要はない。

環境と技術的な変異に関する仮説は私の研究には関係ないように思える。たとえば二重の壁を持った家は夜、寒く華氏 50 度あるいはもっと低くなる高地の PNG (パプアニューギニア) では見つからない。しかし、それは低地の蒸し暑い PNG 湾岸にはある。女性は

はルロワ＝グーランがしばしば言及するベルグソン、とくにその初期的作品である『創造的進化』から示唆を受けたものである。また技術的傾向は「普遍的で、この傾向が技術的事実として具体化する民族集団という文化的地域から独立している」ので、「テクノロジーの内在的な力動と、技術システムとその他のシステムの関係をもとに扱う」という目的をもつルロワ＝グーランにとって重要な概念となる (スティングレー 2009 : 59)。

⁴ この議論は機能的な意味をもたないスタイル的な側面の選択性ではなく、明らかに有効な機能をもっている技術要素をもたないという選択をする事例があるということである。

二つの壁の廊下の入り口で眠るため、蚊が何らかに関係するというのではない。またアンガはすべての季節において周りに蚊がいるか否かに関わらず、風に吹きさらされた小屋を使っている。これらは弓矢や狩猟動物と関係していない。

他方、アイデンティティはアンガ族の物質文化の中で確実に役割を持っている（私はローカルなジェンダーやアイデンティティに関しては長い葉で造ったスカートやマントの材質や形態において示してきた）。しかしそれは観察された断続のセット全体を説明することはできなかった。そしてアイデンティティの指標が関係するところでは、われわれはなぜ特有の違いが強調されるのかをさらに説明する必要がある。なぜ鷺が狩猟されるのか。なぜ蛙は捕られないのか。なぜ草のスカートにその材質が使われその形態になるのか。

歴史に関してはだれもその役割を否定しない。そしてそれが個々のエージェンシーに関して歴史が示すことのできることに否定しない。しかし「私の分布図によって示される二つのアンガ族のグループを歴史が説明する」という文章は、人間は足で歩くことを思い出させるというのと同じ程度の解釈学的価値しか持たないであろう。他に観察された変異を説明できることは何であろうか。歴史に関していえば南アンガ集団の起源に関しては調査が確定している（Ankave, Kapau, Lohiki, Ivori [今は Tawada だが, Todokoro 2010 を見よ]）。彼らは葬送儀礼に必要な特殊な太鼓を使う唯一の集団であるが、それは他のアンガ集団には知られていない（Lemonnier 2006）。さらに同じ集団は低減されたジェンダーの不均衡および協力に対する興味がきわめて低いことによっても他の集団から区別されることが調査で分かっている（Bonnemere 1996 : 386-388, 2014）。彼らの特定の実践のいくつかは、たとえば葬送儀礼ではかつての死者が能動的な役割を果たすことは島の南海岸集団からの借用である。したがってわれわれは複雑な（ドイツの伝播論者ならそういったであろう）異質な様相の混合に直面していることになる。つまり二重に囲まれた家、カエシのある矢の欠如、より拡張した男女関係等の混合である。他の多くの反証を引き起こすとりとめのない他の仮説を作るのでなければ、われわれはいくつかの社会学的特徴の連関、およびそれらの物質的行為との関係の正確についての理由付けにまだ気がついていないことになる。

大文字の H によって「歴史」を呼び覚ますことはここでは興味はない、というのはもしアンガ族が他の環境に生き、あるいは他の隣人と生活しているときに何かをするための特定の方法を採用することに機能的理由が導いたとしても、われわれはそのときの状況や様式（心的態度）を知ることは決してないであろう。正直にいうと、「だれがどこから来たか」そして「誰は誰であるか」という問いはモースの問いに答えを与えることは滅多にない。その問いとは「社会組織と文化の思考システムにおいてモノがもっている特別な役割は何か」という問いである。問題なのはいかに一集団が今日問題になっている、顕著な（そして非機能的な）特徴を伴った技術を使っているかである。歴史的に進化してきたアイデンティティや権力表現に自らを限定すると説明されるべきことを覆い隠してしまうことになる。それはまさに一連の技術と多くの社会的現実の領域との間の全体的な関係である。そのような構成がなぜ存在しているのかを理解することにはまだ至っていないが、今日どのように存在しているのかに関しては少しよい洞察を持つにいたっている。

「恣意的」「慣習的」「構造的」というのは複雑な現実の貧困な表現である。構造論的な

アプローチを人工物や技術に適応するのは袋小路とはいわないまでもまだ問題が多い。石斧が持ちうる信号的な価値についてのレヴィ＝ストロースの指摘から、何かよいアイデアを得ることが困難だと私が彼に言ったとき「あなたはおそらくなにかまだ洗練されていないアイデアにあまりに重きを置きすぎた」と彼は私に言った（ある特定の脈絡で、そして観察者がその使用を理解できたとして、斧が他の文化が同じ目的のために使う他の道具の位置を占めるときに、である）(Levi-Strauss 1973 : 20)。

いずれにせよわれわれもわかるように、そしてそれは簡潔にいうと 70 から 80 年代のことであるが、技術システムと文化や社会組織の他の側面との関係は—それは&で技術「と」文化と表現されるが—ほとんど研究されず、あるいはされたとしてもきわめて曖昧な概念で研究されてきた。じっさいに研究者は、技術の果たすより大きな社会的現象への効果や、ひとつの社会システムのある種の鍵となる次元にある技術における象徴的な書き込みのいずれかを研究することによって、技術が他の社会的現象と連結するという問題を脇に置いてきた。たとえば私のフィールドワークの場合、鉄の道具の農耕への「効果」や物質文化におけるジェンダー的「書き込み」に興味をもったであろう。

ちなみに 80 年代後半に発達してきた「物質文化研究」は 70 年代に行われた操作連鎖の苦労した記述が導いた袋小路の結果であった可能性がきわめて高い。そしてもちろんアパドゥライの「モノの社会的生命」(Appadurai 1986) の成功の結果でもあった。しかし皆知っているようにこの本はきわめて異様なほどモノの物質性には何ら関心を払っていない。

4. 技術的選択に関する新旧の解釈：バルヤ族の奇妙に見える畑のフェンス

とにかく私が最初に人工物を観察し記述したとき文化的技術論におけるフランスの研究の一般的な背景がこのようであったが、文化技術論に基づく物質文化研究の変化しつつある視点を人工物によってこれから論じていこう。それは PNG のバルヤ族によって作られる特定の畑のフェンスである。

簡潔にいうとヨーロッパ人による発見より 60 年経過しても (1951 年)、バルヤの景観は特殊な種類の畑のフェンスでいっぱいだった。それはタコラ (takola) と呼ばれるものである[写真 1,2]。畑は 15 年から 30 年前に耕されてきた森の中に開かれる。そしてタコラ・フェンスの設置は 3、4 日から二週間かかる集団労働である[写真 3]。女達は以前の畑から柱を持ってきて地面を綺麗にして植え付けの前に葉っぱを焼く。一方その間、男たちは木を



写真 1 バルヤ景観



写真 2 タコラ・フェンス

倒し一週間から二週間かけてフェンスを建てる。作業は全体として協業の雰囲気を持ち、男性は圧倒されるくらい高く、しっかりした、規則的な木の壁を将来の畑の周りに苦労して建てていく。

当時の他の「技術論者」と同様バルヤの領地に赴くときに私の目標は二つだった。(1)ある種の技術経済的な「構造」と他の社会生活との対応を見つけること、(2)操作連鎖のある種の規則性や特徴を解説すること、この二つである。とくに私は特定の技術的過程において目指される最終的な物理的結果を得るためには、特定の技術的操作(私は「戦略」と呼んだ)がより重要であることを以前から示してきた。そして私はこれらの種類の操作が特定の人々、特別な地位や権力を持つ人々によって遂行され制御されているであろうことさえも示した。実際に私はそのような規則性はまったく見いだせなかったが、少なくとも操作連鎖の記録はすべての詳細に注意を払うよい方法であることを見いだした。



写真3 タコラ・フェンスの設置

だから私が1978年にバルヤのタコラ・フェンスを男たちが製造している場面を最初に見たとき、どのような種類の詳細な観察が適切なのか知らなかったが、私はあらゆるモノを観察した。私の主なる発見は、きわめて明白だが、この必要以上に強固なこのフェンスを作るための集団労働に含まれる労働量であった。

だから私が1978年にバルヤのタコラ・フェンスを男たちが製造している場面を最初に見たとき、どのような種類の詳細な観察が適切なのか知らなかったが、私はあらゆるモノを観察した。私の主なる発見は、きわめて明白だが、この必要以上に強固なこのフェンスを作るための集団労働に含まれる労働量であった。

経済人類学に興味を持っている者はだれでも、あるいはその時代多かれ少なかれ誰でも同じように、私は土地管理あるいは「所有」(あるいは多分「使用权」の方が適切かもしれない)の問題に関心があった。またゴドリエは、それぞれの男女に期待されている仕事、労働時間について、ほとんど答えを出していた。ゴドリエは、深い森の中で獲物を発見するために道を切り開く、狩猟小屋を作る、その地域に最初の畑を作るために木を切るなどバルヤの間では仕事に関与することはリネージの成員にその集団のテリトリーの一部を使う権利を与えることであることを示した。森のある地点に畑を切り開いた男の父系親族は自由にそれを使う権利を持つ。しかし *technologie culturelle* についていえば問題となっているのは、物質的行為に対する鋭い興味が、われわれが知っているものにどんな人類学的感覚を付け加えるかであった。したがって私は、フェンス造りは家族が耕す権利をもつ部分を割り当てることあると考えていた。

ニューギニアの脈絡ではこのような研究の核心は協力の構成、いろいろな仕事に割り当てられた仕事量、労働の生産性、まだ実験的研究で利用できた石器と比較できてまだ導入が新しかった鉄器の効率性などであった。労働時間の記録はしたがって新しい畑を開墾し、フェンスを作るさいに含まれるいろいろな操作連鎖の記録の一部であった。しかしゴドリエの初期の研究では説明されるべきものによって説明していた：彼の行った石斧と鉄斧の相対的な効率性の実験的比較は、木の太さや堅さによるが、鉄斧の方が多かれ少なかれ1.5から4倍の効率で仕事をする事ができたことを示した。さらに男性の生活は石斧から鉄斧に移行することで1940年代に向上した(少なくとも森を畑に改良するときに必要な仕事

量に関していえば)が、女性の仕事の生産量はその後まで木の堀棒を使い続けたので変わらなかった。おそらく鉄斧の到来はより多くの畑をもたらした、その結果今度は女性により多くの作付けがなされ雑草の抜かれた畑を提供した。このためにサツマイモの生産が増加し、結果としてこの芋類で飼育される豚の数を増加させた。したがって女性はもっと働く必要が生じた。それは兄弟や夫たちのより多くの木を切る能力とより多くの豚を飼育することに対応するためである。



写真4 ジム・シンクレアの記録

私の現在のトピックに関していえば、第二次世界大戦のときの鉄斧の導入は私がここで描いているフェンスの型式をどれくらい長い間バルヤが使ってきたかという問題を提起する。しかし私は彼らが外部から発見された1951年よりもずっと以前から畑を守る主たる手段としてすでにそれを使っていたことは疑い得ないと考える。タコラ・フェンスは近代化の結果ではない。というのは1951年の早い時期にバルヤの塩作民の国に最初に探検に入ったジム・シンクレア（オーストラリアのパトロール・オフィサー）は、訪れたマラワカ（Marawaka）谷においてツタで縛られたブッシュの木で、上手に作られた壁で覆われた畑と集落について言及しているからである[写真4]。特筆すべきことは、そして驚くことにタコラ・フェンスは他のニューギニアやアンガの畑フェンス、たとえばアイボリ・テワダ（Ivory/Tewada）のフェンスとまったく異なっていることである[写真5]。



写真5 アイボリ・テワダのフェンス

ジェンダー関係の研究も畑仕事に関する経済人類学の他の共通のテーマである。バルヤでは畑におけるジェンダーと労働の関係は二つある。最初に両方のジェンダーが関与し分業の中で交わることに限っては、すでに見たように女性が谷の古い畑から棒を運び、そして下草を集めて燃やす[写真6]、一方男性は木を切り倒し、立たせておいた木の枝を下ろしフェンスを作る、ということから見てとれる。男性は決して下草とりはせずサトウキビを刈り取るだけである。



写真6 棒を運ぶ女性

二番目に仕事のジェンダーの分業は、畑の「所有者」が色々な女性に与える畑の中の区画に限定したアクセス権の背景をなす。実際に放棄された畑から古い杭を運ぶのを手伝っ

た女性はその区画に植えて刈り取る権利を得る。同様に森を祓ってフェンスを作ることに参加した男性の妻は植え付けする区画を許される。バルヤの畑は 850 から 5000 平方メートル（あるいはもっと）の広さをカバーし、その中で 20 から 30 の区画がきれいに長い棒をおいて、また明るい黄色ないし赤い花の植物が植えられてできた線（イタータ yitaata＝内部の分離線）によって区分されているのを見るのは珍しくない。15 人あるいはそれ以上の女性がひとつのタロイモの畑を利用することができる。サツマイモの畑の場合はその半分くらいの人数である。

簡潔にいうと 1970 年代の *technologie culturelle* の精神で行われた研究を要約すると、土地管理、労働の構成、労働時間、道具の生産性およびジェンダー関係を見ることによって、その時代に物質文化に関してやるべきこととされたことを私は確かに成し遂げた。しかしこれらの情報のどれも私が観察していたことを有効活用する情報ではなかった：たとえば畑を荒らす豚を防ぐために、一群の男女が印象ぶかく尋常ならざる型式のフェンスを作っていることである。いうまでもなくすでに私に明らかだったのは、飢えた豚に対してサツマイモを守ることはまさにモースの言い方で説明されるべきことに対して十分ではなかった：特定の社会、ここではバルヤ社会が特定のやり方で、特定の人工物、つまりトコラフェンスを作り使っていた、あるいはまだ作っているということである。

すでにいったように、これらのタコラ・フェンスは他のアングのフェンスとまったく異なっている。しかしそれでもバルヤ谷においてはもっとも共通性が高い。他の型式の畑のフェンスよりもよりはるかに共通性が高い [写真 7]。たとえば「輸入」されたポザアマワナヤ *podzaamawanaya*（ここでは接尾辞の *-ananya* は輸入された物につけられる）は交差する棒で作られているが結縛を行わないのでタコラ・フェンスよりもはるかに簡単に作って使うことができるのだ。今日この種の輸入されたフェンスはおのおのの家を囲む私的な土地を区切るために集落域や村の中で恒常的に使われている。それらはまた個人的なコーヒー畑の廻りのみで見られる。しかし通常のとて強固な作りのタコラ・フェンスがまだ集団で作られおのおのの畑を囲うに使われている。



写真7 タコラ・フェンスの共通性

その苦勞の多い、時間の掛かる建造工程が必要であるが、伝統的なタコラ・フェンスはまだ好まれており、どこでも使われる。ここでの問いは「バルヤの畑フェンスの建造をめぐって何が実際に起こっているのか？そしてどのような点で、まさにそれらの物質性が行われていることに含まれているのか、である。

実際にこれらの異様に見えるバリアを廻って何が起きているのかについてアイデアがわくまで 30 年以上かかった。同時期、1990 年代に物質文化研究は独自のプログラムを発達させてきたので、*technologie culturelle* の分野でも技術に関する新しいアイデアが現れ、そして最後には過去 10 年の間にこの分野はまったく変わってしまった。

第一に研究者は技術システムという曖昧な特徴付けと社会学的「雰囲気」との間の広範

囲の関係を見ることをやめてしまった。そしてマルクス主義は凋落し、研究者はかつて通俗的唯物論と非難されてきたものを見るようになった。それはまさにモノの物質性と技術過程そのものである。

技術「システム」を念頭において「選択」に焦点を当てることは、技術的行為が特定の社会的生活の領域（生産、消費、ジェンダー、政治、アイデンティティなど）に対してもっている特定の互惠的「効果」や「反映」に加えて、物質的行為と人工物は、交換不可能な実践の鍵となる要素と、モノの生産やその明らかに主要な物理的な機能とはまったく無関係だが、「政治」「経済」「ジェンダー」などと呼ばれるいろいろな観念と関係する共有された表象のセットであると明確に悟る道である。それでもノウハウの研究 (Chamoux 1981; Mahias 2002)、そしてきわめて最近の「行為」に関する研究 (Ferret 2014) を除いて、観念と技術の関係に関する研究のほとんどはモノの象徴的側面に向けられている。物質性ではなくて、である。

技術の研究において劇的な視点の変化が起こった：生産組織のある側面と社会組織の側面との間の「両立可能性」を考えるのではなく、また技術の変化の社会的「効果」（例 太陽光パネルが及ぼす薪の集団的採集への影響）を研究するのでもなく、そして社会システムのある側面の反映としてスタイルを「判読」する（例 アンガ族の腰巻きと樹皮ケープの製作に使われる物質にジェンダーが読み込める）のでもなく、研究者は今やモノの混合した力を探求しているのである。換言すると生業、生産、運搬、コミュニケーション、交換などにおけるそれらの役割に加え、モノは社会生活において他の鍵となる機能を果たしている：特定の文化の中であるいはその文化によって生きているエージェントのために生活のいろいろな側面を接合する、という機能である。またより最近の言い方ではテクノロークは他の分野の研究者またより最近の言い方ではテクノローク（技術論者 *technologues*）は他の分野の研究者、とくにアクターネットワーク理論、歴史家、人類学者、芸術家あるいは霊長類学者たちと協力を始めている。

バルヤのタコラ・フェンスのケーススタディに戻ることは人類学におけるモノと技術を見る新しい視点を描き出すことにつながる。つまり新しい *technologie culturelle* の視点である。私が示すのは再びバルヤのタコラ・フェンスの事例であるが、それは再びモノと技術の新しい視点を導くのである。すなわち：物質性と非言語的コミュニケーションという視点である。

私の出発点はモノそのものであり、マルクス主義的経済人類学者が注意してこなかったまさにモノである。単にいかにかそれが作られるかを見ても[写真 8]、タコラ・フェンスはとてつもないフェンスであることが分かる。印象的な機能性のない（必要以上の）高さを持ち三層の互いに撚り結びあわされた板が柱で堅く囲まれたバルヤのタコラ・フェンスは豚に対する立派な城壁である。この種



写真 8 タコラ・フェンスの構造

の壁は125から135センチの高さを持つが、尖った縦の柱は145から250センチもの高さになる。フェンスの1単位あたり平均13枚の水平に渡された板ないし丸太、また7から8本の柱がありそれらはすべて手間の掛かるように編み結びされている。垂直柱のそれぞれの一組には2ないし3つの結び目があり、水平の板を支えるようになっている。

1970年代に指摘したが、確かにその偉大なる壁の概観とその頑丈さは10から15人の男性が新しい畑を森に開くときに協力した結果である。

しかしなぜそのフェンスはそれほどしっかりしているのか。またそれほど高く、多くの結び目を持つのか。それほど多くの板と柱があるのはなぜか。なぜそれほど声高になされるのか。なぜニューギニアの基準からするとこれほどすごいモノを作るのか。

事実バルヤの男は畑のフェンスのような印象深いものを一緒につくることを女たちや彼ら自身に無言に告げている。確かにフェンスを作ることはバルヤ社会において他の活動と比べてもジェンダーの非対称性（女性の服従あるいは男性優位と呼んでもいいが）の発現の機会である。つまりそれはバルヤ社会の社会階層の原初形態である（Godelier 1986）。それは男性が集会的な力を示す瞬間であり、その力は彼らが男性儀礼の最中に男子小屋のなかで形成し獲得するものである。

たとえば「協力する」という語彙に関してだが、waremoという一般語彙に加えて、動詞のwegaimwagemoという語彙はロープを結ぶことを助けるという意味にしか使われない[写真9]。またフェンスを作るときに使われる「結び目を作る(pwoyomo)」という一般的な動詞はあるが、とくに「良い結び目」を意味するkwairogusaは想像の通り「男がやるように」という意味になる（Lloyd



写真9 ロープを結ぶ作業

1992: 145, 264)。社会人類学者にとって、板を二列の柱にはめ込んでツタで堅く縛るときに男たちが互いに叫びあいブツブツ口にする姿は、女性に対し彼らの力強さだけでなく、戦争にもいつでもかける用意のある入門者（一緒にイニシエーションを受けた同士）の結束を示すのである。

それ自体タコラ・フェンスの設立はバルヤ社会に通底する協力の圧倒的必要性の場面であり、このような協力自体は二、三日歩く距離にある他のアンガの集団にはまったく欠落していることを知ることは驚くべきことである。20から30人のバルヤの男女が夫婦の家を一日で一緒に作り上げるのに対し、アンカヴェの男たちが自分の家や畑でいつも何週間も一人で働いているのを見るのは珍しいことではない。ちなみに男性の家を造るとき協力はタコラ・フェンスを作るとき



写真10 イニシエーション儀礼

協力と平行関係にあるが、今時間がないので詳細は省略する。この協力はとくにバルヤ社会の鍵となる二つの側面を示唆する：男性のイニシエーションと結婚である。

若者も年寄りも、一緒にタコラ・フェンスをつくる男たちはどんな状況であれ互いに助ける義務を持つイニシエーション同期生であるか、それぞれ姉妹を交換して結婚している間柄である。イニシエーション同期生は 10 歳から 14 歳の若い少年で、男性儀礼の試練を一緒にうけて大人たちの手で「生まれ変わった」間柄であり[写真 10]、その結果どんな状況でも互いにあるいはすべてのバルヤの人々を守るために戦う、身体能力が高く勇敢な、結束の堅い戦士仲間なのである。

ゴドリエを引用すると(Godelier 1986)、男性の儀礼において、彼らは「世代やりネージに関わらず、境界を越えて女性の世界の外側に女性たちに対し、結束を作り出し実践する」のである。定義上、イニシエーションを同時に受けた二人の男性はほぼ想像できるどんな場合においても協力し合わなくてはならない。

義理の兄弟はまた互いに助け合う間柄で、とくに畑仕事においては相互扶助を前提としたもうひとつの範疇である。バルヤの結婚の原則は（多かれ少なかれ残っているが）姉妹交換である：つまり結婚するためには男性やその父親は「姉妹」（本来の姉妹か分類上の姉妹）を将来自分の妻になるべき女性の兄弟に差し上げねばならない。もし妻、つまり妹を悪く扱ったら最悪の敵になってしまうのだが、義理の兄弟はたとえばタオラフェンスを作るときに互いに助け合う良好な関係を示すのである。

要約すると、バルヤのフェンスは畑を荒らす豚から畑を防御するためだけに作られるのではない。そしてたいていの男が参加する騒々しい雰囲気は、フェンス作りとしての彼らの体力と能力を文字通り示すものであるが、それは同時に作物や豚とは関係ない別のことを示している。バルヤの畑を囲むという集団的努力自体が男女の間、イニシエーションの同期生あるいは義理の兄弟の間などの種々の社会関係の再確認なのである。

フェンスを作ること、そして一度作られたフェンス自体は言語を使わずしてバルヤ社会と文化の三つの柱を横断する緊張関係を伝える：男性と女性の不均衡、男性のイニシエーション同期生、そして義理の兄弟の関係である。これらの関係の中に、そしてこれらの関係を通して、バルヤ社会秩序の全体が生み出される。それは第一にそしてもっとも重要なのは協力を強調することである。しかしそれはまた女性に対して声高に主張される男性の団結について強調することによってでもある。またイニシエーション同期生の絶対的互恵的信頼と相互補助についての強調、そして最後に結婚の規則で姉妹を交換している間柄である義理の兄弟の間の仕事における協調と協力についての強調である。

バルヤのフェンスは畑を荒らす豚から畑を守る唯一の手段というだけではない。これらのモノとそれが作られる場面はまた宣言的ではないが一連の規則とバルヤ文化と社会組織の四つの柱に通底する緊張関係を「語る」のである：（1）男女の間の不均衡、（2）イニシエーション同期生間の特殊な関係、（3）義理の兄弟間の関係、そして（4）いかなる場合においても協力する義務。

一方で非言語的なメッセージは女性を競い合う男性（イニシエーション同期生）と兄弟たちの間の協力とライバル関係を告げる。女性と「女性性」一般に対する両義的な態度はフェンスを作る過程の全体に通底している。

これに対してバルヤのもっとも近い親戚であるサンビア (Sambia) 集団はだいたい 20 年から 30 年前に姉妹交換を主なる婚姻規則としては放棄し、また男性の儀礼も途絶えたが、彼らの間ではタコラに似たフェンスや蜂の巣型の家もなくなったのは特筆すべきである。これは (私が主張していることの) 一種の間接的な証明である。またバルヤのタコラ・フェンスはバルヤ社会の日常生活のいろいろな領域、社会制度、社会組織に言及するが、それは単に多義的ではないことを注目することが重要である。

私の仮説はこれらの領域をアクターの心の中で一緒にすることで、フェンス作りは男性と、その力がイニシエーションのさいに貶められると同時に必要とされる女性との間の日常的な緊張について言葉を使わずに何かを「語る」のである。またそれは女性への接近を求めるという意味においては同時に競争者である若いイニシエーション同期生との相互扶助の義務を例示する。

物質的行為は芸術でも儀礼でもないそのようなモノによって開始される非言語的コミュニケーションの中心にあるものである：結び目を結ぶ、柱と板を足す、城壁のようなバリアを作る、という行為である。

またバルヤの社会組織と思考システムの特徴はただ単にフェンスで分離された畑のモザイクの中に「読み込まれる」だけではないことを注意すべきである。私が反響物 (resonator) と呼んだそのような人工物がまったく装飾されないことはもっと尋常ならざることである⁵。それが作られる過程において物質に対して行われる行為に主に表れないのであれば、また尋常なことではない。

メッセージの出現はこれに含まれる感覚的経路の多様性と何らかの関係があるだろう：聴覚、視覚、フェンスを作るときにエネルギーを蓄積させながら男たちがなす努力の感覚、等。幾種類かの感覚 (視覚、聴覚、達成された努力の知覚など) および推論のシステムを起動させて、フェンスはジェンダー、結婚、イニシエーション、そして幸福の感覚などを一緒にしながら共鳴するのである。

4. 結論

私が 1970 年代にバルヤのタコラ・フェンスを最初に観察し、記述し、分析したときの、私自身の最終的なコメントは役にたたなかったであろう。すなわち「それらは多義的である」であった。いまやわれわれはモノの力の混合を記録し理解しようとしている。われわれは社会的現実のいくつかの領域を混合させそれらを横断する語られないルールを表現する、人間のモノに関係する能力に興味がある。モノ (そして物質的行為) はアクターが生活の色々な側面を一緒にするやり方にどのような役割を果たしているのだろうか？表象、価値、観念そして感情を共有するときモノが持っている役割は何か。そして特定の社会関係や一緒に生きるやり方を創造し、維持する (可能性としては変化させる) ときの役割は何だろうか？

⁵ すなわちここで問題にしているのは、社会的に重要なモノは装飾的要素のないフェンスである。フェンスを男性が共に造る行為自体が何らかのメッセージを持つことが重要なのである。

過去 10 年の間、*technologie culturelle* が同じ名称あるいはときには別の名称のもとに再来してきた。モノの製作や使用における物質的行為を記録する研究者は、共有された思考世界や行為の形成におけるモノの代替不可能な役割を示してしてきた。*technologie culturelle* は今やモノ、物質的な諸行為、そして技術がもつ特殊で代替不可能な役割を開拓しようとしている。ある社会のいろいろな社会関係の領域、また思考のシステムの諸様相が収斂する、あるいは共存しようといった方がよいかもかもしれないが、そのような状況の中でそれらが果たす役割について開拓しているのである。

あるモノは、たとえばバルヤのタコラ・フェンス、あるいはまたアンカヴェ (Ankave) のドラムあるいはバルヤの塩棒であるが、それらは「概念の混合の物質的錨」である (Hutchins 2005)、そしてそれらが参与しているコミュニケーションの様態の鍵となる様相は「意味は色々な方法で (その中に) コード化されている」(Campbell 2002 : 191) ことである。また F.ダモンがいうように「それらはきわめて複雑な関係の統合である」(Damon 2008 : 126)。

オセアニアにおける最近の一連の研究は多かれ少なかれ新しいアプローチを示している。M.マッケンジーの『両性具有のモノ：中央ニューギニアにおける紐バッグとジェンダー』(MacKenzie 1991) において、男性の儀礼に使われる網のバッグを女性が作るという事実は、男性に女性の出産能力がこれらの儀礼が成功するために必要であることを認識させることを示している。J.リーチ (Leach 2002) は同じように、ライ (Rai) 海岸のレイテ (Reite) の割れ目太鼓の製作の中にまさに神話、儀礼そして技術が混合していることを示している。F.ダモンのマッシムにおけるカヌー研究はマリノフスキーが描いた有名なクラ交換の場所としてもっともよく人類学者に調査されてきた地域に関するわれわれの考え方を根本的に変更した (Damon 2008)。

S.レヴォロンについていえば (Revolon 2007, 2014)、彼女はソロモン諸島のオワ (Owa) において技術的行為そのものの中に、すなわちソロモン諸島民が碗を作るときの技術、つまりそれは木や真珠母貝を象るような行為であるが、そのような製作行為は専門家の知識と特定の精霊とを連結させることを示した。それ以上に彼女が示したのは物理的および光学的な効果、つまり (貝殻の) 光沢がいろいろな形で生産され、一連のモノによって参照されることである

物質文化のこの新しい役割については理論的にそれほど洗練されていないが、『乗り物：車、カヌー、および道徳的想像力の他の隠喩』(Lipset and Handler 2014) の中の近年の論文は私が描いてきた非言語的な種類のコミュニケーションに色々なモノが参加していることを示している。とくにアメリカで収蔵されてきている第二次世界大戦の飛行機、旧ユーゴスラビア型のフィアット自動車、日本の軽自動車などである (Roth 2014)。

最後に一言：新しい *technologie culturelle* によって得られた結果は「物質文化研究」が行って見だしてきたこととは顕著に異なることは特筆すべきである。物質文化研究はモダニティのコンテクストにおける非産業社会および産業世界におけるいろいろな社会的戦略、アイデンティティ、地位問題においてモノが含まれていることを主に見てきた。また S.クフラーによると、物質文化研究はしばしば「人々が、モノあるいはモノの部分の選択、操作あるいは変換を含めてモノを自分のものにする過程」である商品の消費との関係を見

てきた (Küchler 2014)。彼らは「物質性」に興味があると主張するが、彼らは物質世界、モノのまさに物理的な次元にまだかつて注意を払ってこなかったのである。

そして「アイデンティティ」「論争」「評価」「権力」「社会的階層」あるいは「経済的な地位」のような概念はどれも私が「共鳴者」と呼んだような、モノを巡ってなにが起きているのかを記述し説明する道具にはならないのである。

われわれが示したのは30年前に *technologie culturelle* が興味を持ったものあるいは「物質文化研究」が従来扱うのとは異なるなにものかを明らかにしている。よいニュースは物質的行為の社会文化的次元に関するモースの提言が今や真剣に捉えられ、他の方法では得られない人類学的結果に導くことである。

もうひとつのよいニュースは今日モノと技術に興味を持つ *Technologie Culturelle* と物質文化研究および他の分野ないし下位分野、たとえばアクターネットワーク理論の専門家、歴史家、芸術人類学者、霊長類学者、社会学者、考古学者、儀礼や「物質的宗教」の専門家などが一緒に仕事をするようになったことである。それは名前をあげると *Technique & Culture*、*Journal of Material Culture*、そして *Material Religion* などの学術雑誌においてである。

参考文献

Appadurai, A.

1986 *The social life of things. Commodities in cultural perspective*, Cambridge: Cambridge University Press.

Balfet, H.

1975 “La technologie,” dans R. Cresswell (dir) *Elements d'ethnologie, Tom. 2 six approches*, pp. 44-7 Paris: A. Colin.

Bonnemère, P

1996 *Le pandanus rouge. Corps, différence des sexes et parenté chez les Ankave-Anga*, Paris: CNRS Éditions/Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

2014 “A relational approach to a Papua New Guinea male ritual cycle,” *Journal of the Royal Anthropological Institute* 20(4): 728-745.

Boyer, P.

2000 *Religion explained: the evolutionary origins of religious thought*, New York: Basic Books.

Campbell, S.F.

2002 *The Art of Kula*, Oxford: Berg.

Chamoux, Marie-Noëlle.

1981 “Les savoir-faire techniques et leur appropriation: Le cas des Nahuas du Mexique,” *L'Homme* 21 (3): 71-94.

Cresswell, R.

1972 "Les trois sources d'une technologie nouvelle," dans Thomas, J. M. C. et L. Bernot (eds) *Langues et techniques, nature et société. vol. 2 Approche ethnologique, approche naturaliste*, pp. 21-27, Paris: Klincksieck.

Damon, F.H.

2008 "On the Ideas of a Boat: From Forest Patches to Cybernetic Structures in the Outrigger Sailing Craft of The Eastern Kula Ring, Papua New Guinea," in Clifford, S. and T. Kaartinen (eds) *Beyond the Horizon: Essays on Myth, History, Travel and Society: In Honor of Jukka Siikala*, pp. 123-144, Helsinki: Finnish Literature Societ.

David, N., & C. Kramer, C.

2001 *Ethnoarchaeology in Action*, Cambridge: Cambridge University Press.

Ferret, C.

2014 "Towards an anthropology of action. From pastoral techniques to modes of action," *Journal of Material Culture* 19: 279-302.

Godelier, M.

1971[1969] "'Salt Currency' and the Circulation of Commodities among the Baruya of New Guinea," *Studies in Economic Anthropology* AS-7: 52-73.

1977 [1973] *Perspectives in Marxist Anthropology*, Cambridge: Cambridge University Press.

1979 [1973] "Stone Tools and Steel Tools Among the Baruya of New Guinea: Some Ethnographic and Quantitative Data," *Social Science Information* 18: 663-678.

1986 *The Production of Great Men. Male domination among the New Guinea Baruya*, Cambridge: Cambridge University Press.

Leach, J.

2002 "Drum and Voice. Aesthetics and social process on the Rai Coast of Papua New Guinea," *Journal of the Royal Anthropological Institute* (n.s.) 8: 713-734.

2012 "La mort du tambour à fente.," *Techniques & Culture* 58: 28-47.

Leroi-Gourhan, A.

1973[1945]. *Evolution et techniques. Milieu et technique*, Paris: Albin Michel.

Küchler, S.

2014 "Beyond Objectivation" [Comment on Lemonnier, Pierre 2012 *Mundane Objects: Materiality and Non-Verbal Communication*], *Hau: Journal of Ethnographic Theory* 4(1): 531-536.

Lemonnier, P.

1983 "L'étude des systèmes techniques, une urgence en technologie culturelle," *Techniques et culture* 1: 11-34.

1986 "The study of material culture today : toward an anthropology of technical systems," *Journal of anthropological archaeology* 5(2): 147-186.

- 1992 *Elements for an Anthropology of Technology*, Ann Arbor: Museum of Anthropology.
- 2006 *Le sabbat des lucioles. Sorcellerie, chamanisme et imaginaire cannibale en Nouvelle-Guinée*, Paris: Stock.
- 2012 *Mundane Objects. Materiality and Nonverbal Communication*, Left Coast Press: Walnut Creek.
- Lévi-Strauss, C.
- 1973 *Anthropologie structurale deux*, Paris: Plon.
- 1998 “Retours en arrière,” *Les Temps modernes* 598: 66-77.
- Lipset, D. and R. Handler
- 2014 *Vehicles. Cars, Canoes, and Other Metaphors of Moral Imagination*, New-York: Berghahn.
- Lloyd, J. A.
- 1992 *A Baruya-Tok Pisin-English Dictionary*, Canberra: The Australian National University.
- Mahias, M.-Cl.
- 2002 *Le barattage du monde. Essais d'anthropologie des techniques en Inde*, Paris: Editions de la Maison des sciences de l'homme.
- MacKenzie, M.
- 1991 *Androgynous objects: String bags and gender in Central New Guinea*, Amsterdam: Harwood Academic Publishers.
- Mauss, M.
- 1934[2006] “Les techniques du corps,” *Journal de psychologie* 32: 271-293. Republished as “Techniques of the Body”, in M. Mauss *Techniques, Technology and Civilisation*, pp. 77-95, edited and introduced by N. Schlanger, New York: Durkheim Press.
- Revolon, S.,
- 2007 “Les esprits aiment ce qui est beau’. Formes, sens et efficacité rituelle des sculptures owa (Est des îles Salomon),” *Annales de la Fondation Fyssen* 21:63-75.
- 2014 “Les couleurs de la métamorphose. La lumière comme mode d'action sur le monde”, dans Mélandri, M. et S. Revolon (eds.) *L'éclat des ombres. L'art en noir et blanc des îles Salomon*, pp. 146-151, Paris: Somogy Editions d'art.
- Roth, J. H.
- 2014 “Is Female to Male as Lightweight Cars are to Sports Cars? Gender Metaphors and Cognitive Schemas in Recessiary Japan,” in Lipset, D. and R. Handler (eds) *Vehicles. Cars, Canoes, and Other Metaphors of Moral Imagination*, pp. 88-108, New-York: Berghahn.
- Salisbury, R. F.

1964 “Change in Land Use and Tenure among the Siane of the New Guinea Highlands (1952-61),” *Pacific Viewpoint* 5(1): 1-10.

Schiffer, M. B.

1975 “Behavioral Chain Analysis: Activities, Organization, and the Use of Space,” *Fieldiana Anthropology* 65: 103-119.

1994 “General/Theoretical Anthropology. Elements for an Anthropology of Technology. Pierre Lemonnier,” *American Anthropologist* 96: 202-204.

Weiner, A.B.

1983 “From words to objects to magic: Hard words and the boundaries of social action,” *Man* (n.s.) 18(4): 690-709.

Tadokoro, K.

2010 “An Analysis of the Organization of Groups for Fish Poisoning among the Tewada of Papua New Guinea,” *People and Cultures in Oceania* 25: 1-22.

Wayland, K.

2014 “It’s Not an Airplane, It’s My Baby’ Using a Gender Metaphor to Make Sense of Old Warplanes in North America,” in Lipset, D. and R. Handler (eds) *Vehicles. Cars, Canoes, and Other Metaphors of Moral Imagination*, pp. 69-87, New-York: Berghahn.

Zivkovic, M.

2014 “Little Cars that Make Us Cry. Yugoslav Fica as Vehicle for Social Commentary and Ritual Restoration of Innocence,” in Lipset, D. and R. Handler (eds) *Vehicles. Cars, Canoes, and Other Metaphors of Moral Imagination*, pp. 111-132, New-York: Berghahn.

(訳注) 参考文献

ドゥルーズ、ジル・フェリックス、ガタリ

2010 『千のプラトー：資本主義と分裂症』、下巻、河出書房。

Leroi-Gouhan, André

1943 *Évolution et Techniques, Vol 1: L’Homme et la Matière*, Paris: Albin Michel.

1945 *Évolution et Techniques, Vol 2: Milieu et Technique*, Paris: Albin Michel.

スティングレール、ベルナール

2009 『技術と時間』 1、法政大学出版局。

解 説

ピエール・ルモニエ (Pierre Lemonnier) 氏は、1948年フランス生まれの民族学者、現在はエクス＝マルセイユ大学 (Aix-Marseille University) の教授であり、また、フランス国立科学研究センター (CNRS Centre National de Recherche Scientifique) の名誉教授である。彼は1993年まで続いた *Techniques et Culture* 誌の創始者の一人であり、また「オセアニア社会のアイデンティティと変容」研究グループの指導者でもある。またオセアニア研究資料センター (Centre de Recherche et de Documentation sur l'Océanie) の主任でもある。



写真1 南山大学での講義風景
(2015年1月31日撮影)

ルモニエ氏が2014年1月から2月にかけて、京都大学の東南アジア・アフリカ研究センターの招きで弟子筋のフレデリック・ジュリアン (Frédéric Julian) 氏とともに来日した折、南山大学人類学研究所でもセミナーをしていただいた。ここに翻訳した論考は講演の英文発表原稿に後日手を入れ、参考文献をつけていただいたものを訳出したものである。

ルモニエ氏はマルセル・モースが先鞭をつけ、先史学者のアンドレ・ルロワ＝グーランが発展させたフランス語圏技術の人類学 FTAT (Francophone Tradition of Anthropology of Techniques) の第一人者である¹ (e.g. Audouze 1999, 2002)。彼の学位論文はフランス国内の製塩業についてであった(1980)。海水から塩を作る製塩業がフランス国内で多様な技術過程をもっていることを動作連鎖あるいは操作連鎖、すなわちシェーン・オペラトワール (chaîne opératoire : 原義は「操作の連結」) を分析手法として分析したものである。

ルモニエ氏は1978年以来、モーリス・ゴドリエ (Maurice Godelier) らとパプアニューギニアの民族学調査を開始し、ゴドリエと密接な関係をもって多くの業績を残したことは本論文からもうかがうことができる。彼はまたブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) との共編著『先史時代から大陸間弾道弾へ：技術の社会的知性について』 (Latour and Lemonnier 1994) も公刊している。

ルモニエ氏は1990年代にフランスの研究者には珍しく積極的に英語圏との対話を行った(1986, 1989)。その端緒がケンブリッジ大学の考古学雑誌 (*An Archaeological Review from Cambridge*) における特集にフランス系技術人類学からは R. クレスウェル (Cresswell 1990)、および英語圏からは T. インゴルド (Ingold 1990) や N. シュランガー (Schlanger 1990) とともに英語の論文を寄稿している (Lemonnier 1990a)。それと前後して英語による初のフランス流技術人類学の教科書『技術人類学綱要』(1992) を著し、また『技術的選択』 (Lemonnier ed. 1993) の編著も行っている。

¹ FTAT という名称は次の論考などで使用されている (Naji and Douny 2009)。



写真2 南山大学人類学博物館にて
(2015年1月31日撮影)

この1990年代前半はルロワ＝グーランの大著 *Le Geste et Parole* (1964, 1965) すなわち『身ぶりと言葉』(ルロワ＝グーラン 1973) が英語に翻訳されたこともあって、英語圏においてフランス技術人類学への認識が急速に進展した時でもあった(後藤 2012)。この後、英語圏でもシュランガーや M. ドブレスなどの考古学者が積極的にシェーン・オペラトワールの分析手法を導入した (Schlanger 1994, 2005; Dobres 1999, 2000)。またそれまで operational chain など

と訳されてきたこの概念を *chaîne opératoire* と原表現で英語の論文でも使うことが一般化した。そして当時まだルロワ＝グーランのこの大著に対する認識はなかったようであるが、*technique* と *technology* の違いを意識しながら社会現象としての技術という論点を展開していたのは T. インゴルドであった(1990, 1993)²。

一方類似の分析手法をとっていたマイケル・シファー (Michael Schiffer) ら米国の研究者と相互理解が始まったが、そのことにルモニエ氏は本論でもふれている。一方、シファーもフランス技術人類学の存在をこの時期に知り、このようなことは、自分たちはずっと以前からやっていたと述べると同時に、ルモニエ氏の言う技術的選択論について説明が不十分というような批判的見解を表明している (Schiffer 1994)³。

ところがルロワ＝グーランの翻訳、およびクレスウェルやルモニエの活躍によって英語圏にフランス語圏技術人類学の伝統を知られるようになった 90 年代前半以降、ルモニエ氏は技術論的な論考を書くのをやめてしまった。そしてしばらくは儀礼や象徴性あるいは神話などの論考を重ねていくことになる (Lemonnier 1990b, 2006)。彼が技術論からしばら

² フランス語圏技術人類学 FTAT (Francophone Tradition of Anthropology) では人類学という技術を意味する概念として、伝統的に *technique[s]* が使われてきたが、英語圏人類学 AA (Anglophone Anthropology: Naji and Douney 2009) では *technology* が使われてきた。一方フランス語の *technique/technologie* と英語の *technique/technology* には微妙な差があることはシゴー [Sigaut 1985, 1994] やインゴルド [Ingold 1993] の指摘で明らかにされている。筆者はルロワ＝グーランの大著 *Le Geste et la Parole* [1964, 1965] の翻訳本 (英訳 [1993]、独語訳 [1988]、二冊の和訳 [1973, 2007]) における *technique[s]* および関連する *technicit[é]* の訳語の文脈による訳語比較を試みている (後藤 2014)。

³ シファーは自らの技術的連鎖論を行動考古学と呼んだが (Schiffer 1976)、実はそのアイデアの源泉は文化唯物論の泰斗マーヴィン・ハリスの初期的作品『文化的モノの性質』 (Harris 1964) に由来するのであった (1995)。ハリスは自分の妻の台所仕事とくに料理の準備は、さまざまな作業が平行して行われたり、合流したりする複雑な連鎖として描き出したのである。

く離れていた理由こそ本論で明らかにされるべき点であった。

じつはこれにはシファーが批判した点も無関係ではなかった。もともとルモニエ氏はアングやバルヤ族の行っている特定技術の採用について構造主義的な意味ないし記号論的な連関を見いだそうとしたわけではない。物質文化の文様などに個人ないし集団のアイデンティティあるいはコミュニケーション作用を直接的にみようとしたりした英語圏の民族考古学者の業績にも批判的であった(e.g. Wobst 1977; Hodder 1982; Wiessner 1984; Sackett 1986)。一方、ルモニエ氏は機能的に関連しない技術要素の組み合わせを「多義的」な意味を持つ「社会的な選択」であるとしたのである。しかしそれはルモニエ氏も本論で認めるように、何も言っていないのに等しかった。

シファーが批判したのはまさにこの点でもあった。シファーは彼の言う遂行的マトリクス(performance matrix)によって、なぜそのような選択がなされたのか説明すべきであるとする。ただしシファーの説明はたとえば、ある土器の形態が採用されるのは熱効率が有利なためであるというような技術的な次元だけではなく、女性たちが絶えず金属壺を綺麗に洗うのは視覚的あるいは象徴的効率のためであるとか、ある宗教的要素が選択されるのは、集団の結束を高める遂行的有効性があるからだ、という機能論的な次元の説明になるのであるが(Skibo and Schiffer 2008)。

さて10年近い技術論における沈黙を破ってルモニエ氏が発表したのが『ありふれたモノ：物質性と非言語的コミュニケーション』(2012)である。その中でかつてM.ゴドリエ(1976)らと調査したニューギニア高地民における住居、鰻罟、太鼓、そして垣根などを彼らが作り続ける意味について問い直した。さらにこの本ではレーシングカーやその模型など現代の西欧社会におけるモノについても比較考察を行っている。そしてここに翻訳した論考ではその著作の骨子をタコラと呼ばれる垣根作りに絞って論じたものである。

『ありふれたモノ』については*Hau: Journal of Ethnographic Theory*誌の4巻1号にて「Book Symposium」と称してB.ラトゥール、C.バラード(Ballard)、T.インゴルド、S.クフラー(Küchler)らによって書評が寄せられ、それに対してルモニエ氏が「モノの混合する力」という応答の論考を書いている(2014)。書評の多くはルモニエ氏が提唱した共鳴者(resonator)という概念を巡ったものである。これは物質文化を集団のアイデンティティやジェンダー関係を象徴するものとして捉えるのではなく、モノが日常的な社会实践の必要不可欠な要素としてさまざまな社会的メッセージと共鳴するといった考え方である。これはラトゥールのいうモノと人間のハイブリッド性、あるいはインゴルドのいう束ね(bundling)理論(Ingold 2013)、あるいはE.ハチンスのいう「物質的錨」(Hutchins 2005)などと同じような指向性をもった概念である。

今後これらの諸概念がどのように比較あるいは統合されていくか注目すべきであるが、人類学の技術論あるいはマテリアリティ論においてルモニエ氏のこの著作は参照必須の業績とされることはまちがいないと思われる。そしてここに訳出した本論文はそのよき導入の位置づけになるろう。

(後藤 明)

参考文献

Audouze, Françoise

1999 "New advance in French prehistory," *Antiquity* 73: 167-175.

2002 "Leroi-Gourhan, a philosopher of technique and evolution," *Journal of Archaeological Reserach* 10(4): 277-306.

Creswell, Robert

1990 "'A new technology" revisited," *Archaeological Review of Cambridge* 9(1): 39-54.

Dobres, Marcia-Anne

1999 "Technology's links and chaînes: the processual unfolding of technique and technician," In M.Dobres and C.R. Hoffman (eds.), *The Social Dynamics of Technology*, pp. 124-146. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.

2000 *Technology and Social Agency*. London: Blackwell.

ゴドリエ、モーリス

1976 「ニューギニア・バルヤ族における《塩の貨幣》と商品流通」M.ゴドリエ『人類学の地平と針路』(山内 訳)、pp.219-258、紀伊国屋書店。

後藤 明

2012 「技術人類学の画期としての1993年：フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考」『文化人類学』77(1): 41-59.

2014 「現代のモノ作り論からみた技術と学習に関する研究ノート」『交代劇：A-02 班研究報告書』4: 87-114.

Harris, Marvin

1964 *The Nature of Cultural Things*. New York: Random House.

Hutchins, Edwin

2005 "Material anchor for conceptual blends," *Journal of Pragmatics* 37: 1555-1577.

Hodder, Ian

1982 *Symbols in Action*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ingold, Tim

1990 "Society, nature and the concept of technology," *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 5-17.

1993 "Tool-use, sociality and intelligence," In K.R. Gibson and T. Ingold (eds.), *Tools, Language, and Cognition in Human Evolution*, pp. 429-445. Cambridge: Cambridge University Press.

2013 *Making: Anthropology, Archaeology, Art and Architecture*, London: Routledge.

Latour, Bruno and Pierre Lemonnier (eds.)

1994 *De la Préhistoire aux Missile Balistiques: L'Intelligence Sociale des Techniques*, Paris: Découvert.

Lemonnier, Pierre

1980 *Les Salines de L'Ouest: Logique Technique, Logique Social*, Paris: Editions de la Maison des Sciences de L'Homme.

1986 "The study of material culture today: towards an anthropology of techniques," *Journal of Anthropological Archaeology* 5: 147-186.

1989 "Bark capes, arrowheads and Concorde: on social representations of technology," In I. Hodder (ed.) *The Meaning of Things: Material Culture and Symbolic Expression*, pp. 156-171, London: Routledge.

- 1990a “Topsy turvy techniques: remarks on the social representation of techniques,” *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 27-37.
- 1990b *Guerres et Festins: Paix, Échnages et Compétition dans les Hautes Terres de Nouvelle-Guinée*, Paris: Edition de la Mqaison des Sciences de l’Homme.
- 1992 *Elements for an Anthropology of Technology*, Anthropological Papers 88, Museum of Anthropology, University of Michigan.
- 2006 *Le Sabbat des Lucioles: Sorcellerie, Chamnisme et Imaginaire Cannibale en Nouvelle-Guinée*, Paris: Stock.
- 2012 *Mundane Objects: Materiality and Non-Verbal Communication*, Walnut Creek: Left Coast Press.
- 2014 “The blending power of things,” *Hau: Journal of Ethnographic Theory* 4(1): 537-548.
- Lemonnier, Pierre (ed.)
- 1993 *Technological Choices: Transformation in Material Culture since the Neolithic*. London: Routledge.
- Leroi-Gouhan, André
- 1964 *Le Geste et la Parole, Vol 1: Technique et Langage*, Paris: Albiin Michel.
- 1965 *Le Geste et la Parole, Vol 2: La Mémoire et les Ryhmes*, Paris: Albiin Michel.
- 1973 『身ぶりとことば』(荒木亨訳)、言叢社。
- 1988 *Hand und Wort: Die Evlution von Technik, Sprache und Kunst*, Suhrkamp: Frankfurt.
- 1993 *Gesture and Speech*, Cambridge: The MIT Press.
- 2007 『動作と言葉』(高橋壮訳)、あるむ。
- Naji, Myriem and Laurene Douny
- 2009 “Editorial,” *Journal of Material Culture* 14: 411-432.
- Sackett, James R.
- 1986 “Isochrestism and style: a clarification,” *Journal of Anthropological Archaeology* 5:266-277.
- Schiffer, Michael B.
- 1976 *Behavioral Archaeology*, New York: Academic Press.
- 1994 “A book review on “Elements for an Anthropology of Technology.”,” *American Anthropologist* 96: 202-204.
- 1995 “Behavioral chain analyses: activities, organization, and the use of space,” In M.B. Schiffer, *Behavioral Arcaheology: First Principles*, pp.55-66. Salt Lake City: University of Utah Press.
- 1990 “Techniques as human action: two perspectives,” *Archaeological Review from Cambridge* 9(1): 18-26.
- 1994 “Mindful technology: unleashing the chaîne opératoire for an archaeology of mind,” In Renfrew, C. and B. Zubrow (eds.), *The Ancient Mind*, pp.143-151. Cambridge: Cambridge UP.
- 2005 “The chaîne opératoire,” In Renfrew, C. and P. Bahn (eds.), *Archaeology: the Key Concepts*, pp. 159-163, London: Routledge.
- Sigaut, François
- 1985 “More (and enough) on technology!” *History and Technology* 2: 115-132.
- 1994 “Technology,” In T. Ingold (ed.), *Companion Encyclopedia of Anthropology*, pp. 420-459, London: Routledge.
- Skibo, James M. and Michael B. Schiffer
- 2008 *People and Things: A Behavioral Approach to Material Culture*, New York:

Springer.

Wiessner, Polly

1984 "Reconsidering the behavioral basis for style: a case study among the Kalahari San," *Journal of Anthropological Archaeology* 3:190-234.

Wobst, H. Martin

1977 "Stylistic behavior and information exchange," In C.E. Cleland (ed.), *Papers for the Director: Research Essays in Honor of James B. Griffin*, pp.317-342, Ann Arbor: University of Michigan.